

【無料配布】短編ミステリ

文学フリマ岩手11書き下ろし

毒入りまんじゅう事件

作・庵字

俺はこれまで二度も失敗している。従兄弟の照幸殺害をだ。一度目は紅茶で、二度目はアイスで、毒殺を狙ったのだが、どちらも失敗に終わってしまっている（文学フリマ福岡11配布「毒入り紅茶事件」、同東京41配布「毒入りアイス事件」参照。新生ミステリ研究会ホームページで読めます）。叔父のひとり息子であるあいつが死ねば、叔父の遺産は俺のもとに転がり込んでくるというのに……。

叔父——照幸の父親は仕事上、よくモノをもらっている。人望があるからではない、ただのご機嫌取りだ。金以外に興味のない叔父は、そういった贈答品を——まとまった額に換金可能な代物でもなければ——息子の照幸にくれている。

照幸の家の台所に積まれた、それら贈答品の山の中に、豪華な箱入りのまんじゅうを見つけた。中が四等分されて、それぞれに高級なまんじゅうが入っている。消費期限は三日後。これを発見したとき、俺の頭に新たな計画が閃いた。俺は、四つのまんじゅうすべてに毒を注入したうえで、箱を目につかない奥へ押し込んだ。このまんじゅうの出番が来るのは、もう少しあとだ……。

三日後、俺は幼なじみの梓を連れて、照幸の家を訪れた。俺たちを茶の間に招き入れた照幸は台所へ向かった。茶でも出すつもりなのだ。そうなると……。俺は「トイレに行く」と梓に嘘をついて照幸を追った。案の定、照幸は台所でお茶を用意しており、茶請けとして出すお菓子を見繕っていた。俺もその隣に立ち、「これなんか、いいんじゃないか？」

贈答品の山に押し込まれている（俺が押し込んだ）まんじゅう箱を指さした。

「梓ちゃんって、こういうの好きかな？」

「好き好き。あいつは和菓子が好物なんだよ。それに、ほら……」俺は箱の側面に貼られたラベルを指し示し、「消費期限が今日までだぜ」

本当だ、とラベルに目をやった照幸は、迷わずその箱を盆に載せた。それを確認すると、いかにもトイレを済ませてきたふうを装い、俺は茶の間に戻った。

すぐに照幸もお盆を抱えて茶の間に戻ってくると、「うわー、美味しそう！」

高級な箱入りまんじゅうを見て、梓が目を輝かせた。

さて、三日前に俺は、この四個のまんじゅうすべてに毒を入れたわけだが、一つ食べただけで死ぬことはない。なぜなら、俺が注入した毒は、致死量の半分だけだからだ。このまんじゅうは二個食べることで初めて毒が効果を発揮するのだ。俺たちは三人。対してまんじゅうは四個。当たり前だが等分は出来ない。誰かが二個まんじゅうを食べることになる。その、まんじゅうを二個食べることにする——すなわち、致死量の毒を食らうことになるのは誰か？……照幸だ。

どういうことか。実は、ここへ来る前、俺と梓は和風喫茶店に寄って、すでに甘い和菓子をこれでもかと腹に収めてきたのだ。この状態で、さらにまんじゅうを——通常の温泉まんじゅうなどと比べて倍以上の大きさがある、この高級まんじゅうを——二個も食べられるわけがないのだ。俺と梓が一つ余るまんじゅうを照幸に譲ることになるのは必然。まんじゅうは各自が勝手に手に取ることになるだろう。俺に——当然、梓にも——この場でまんじゅうに毒を盛る機会などない。まんじゅうはすべて三人の胃袋に消え、照幸だけが死ぬことになる。

「俺と梓は——」ひとつでいいよ。そう言いかけたところに、

「じゃんけんだな」

梓の声がかぶせられた。

……なに？ いま、なん言った？ 意味不明な言葉を言い放った梓は、ウォーミングアップかのごとく、両手を組み合わせて手首のストレッチをしている。

「じゃんけん？」

オウム返しした俺に、梓は、

「そうだよ」

なにかおかしいことを言ったか？ とでもいうような目を向けてくる。

「ど、どうして、この場でいきなりじゃんけんなんて……」

「決まってるだろ」梓は、座卓中央に置かれた箱を見やり、「私たちは三人。対してまんじゅうは四個。当たり前だが公平に分けることは出来ない。まんじゅうを二個食べられるやつはひとりしかないことになるわけだ。だから、そのひとりを、こうしてじゃんけん決めてようっていうんじゃないか」

「い、いや、しかし、梓、お、お前と俺は、ここへ来る前に、もう嫌というほど和菓子を食べてきたじゃないか、喫茶店で」

「なに？ 二人で喫茶店だと？」

なぜか照幸が反応したが、俺はそんなことには目もくれずに、

「だから、残る一個のまんじゅうは照幸に譲るべきだと思うんだが……」

「関係ないね」

言下に撥ね除けられてしまった。

「ぼ、僕はひとつでいいから、まんじゅうは、あ、梓ちゃんが……」

照幸！ 遠慮なんかするな馬鹿野郎！ お前が食わなきゃ意味ないだろ！

「そういうわけにはいくか」が、この提案も梓は一顧だにしなかった。「情けでまんじゅうにありつこうだなんて、私はそこまで落ちぶれちゃいないよ。正々堂々勝負のうで勝ち取るべきだ。このまんじゅうには、そうするだけの……いや、そうしなければならぬだけの価値がある」

謎の拘りを見せてきた。こうなった梓はやつかいだ。言葉で言い含められる相手ではない。三人でじゃんけん勝負を行うことになるのは免れないだろう……。

「あ、梓ちゃんがそう言うなら……」

照幸も梓に屈服した。ここで照幸に二個食わせようと拘泥しても怪しまれてしまう。なんということだ。とどめとなる毒入りまんじゅうが、俺か梓の手に渡る可能性が生じてしまった……。俺は当然のこと、ここで梓を死なせるわけにもいかない。やつには「まんじゅうは各自が勝手に取って、誰にも毒物を混入させる機会はない」と証言してもらおう役目がある。しかも、ここで梓が死んでしまつては、後日、俺が首尾よく照幸を殺せたとしても絶対に怪しまれてしまう。

俺の手にまんじゅうが渡ることを防ぐため、俺だけ勝負を降りるか？——いや、俺が抜ければ、照幸の手にまんじゅうが渡る確率は1/2。俺が勝負に加われれば1/3だ。照幸の死だけに焦点を当てれば、勝負を降りたほうが得策だが、そうしたら、裏を返せば梓が死ぬ確率も1/2となつてしまう。対して、俺が勝負に加われれば、梓の死の確率は1/3。照幸の手にまんじゅうが渡ればそれでよし。俺が勝つたとしたら、満腹だからと言ってまんじゅうを持ち帰って処分し、今日の計画はご破算にして、後日また別の計画を練ればいいだけだ。であれば、より危険性——梓の死の可能性——を減らすほうが賢明な選択だ。

「……いいだろう」

俺は覚悟を決めた。そうこなくっちゃ、と梓は笑みを浮かべる。

「最初はグー……じゃんけん……」

ぽん、のかけ声とともに三人の手が同時に突き出され……負けたーッ！ 俺のひとり負け！ 照幸と梓との決勝戦！ これで確率は1/2。頼む……照幸……。

「最初はグー……じゃんけん……」

梓、チョキ。対する照幸は……パー！ 照幸パー！ 圧倒的パー！

「お前！ なに負けてんだよ！」

「なんでお前に怒られなきゃいけないんだよ」

文句を言う照幸の前で、涙目になっていることを自覚した。というか、お前、遅出ししてなかったか？ 俺じゃなきゃ見逃してしまうほどの恐ろしく絶妙な僅差だったが、遅出ししなかったか？ と思つたが、それは道理に合わない。遅出しするのは勝つためだ。遅出しして負ける人間などいるわけがない。

勝利をおさめた梓は、よっしゃ！ と拳を握り、そのまま手をまんじゅうに伸ばそうとする。まずい、このままでは……。この危機を脱する策を俺はひとつしか思いつかなかった。大きく息を吸い込むと、俺は……。

「——ぶはつくしよい！」

けたたましくしゃみを放つた。箱に収められた四つのまんじゅうに、シャワーのように降り注ぐ俺の唾……。

「す、すまん——」

頭を下げようとしたところに、梓が座卓を超えて飛びかかってきた。目にもとまらぬ速さで俺の背後をとった梓は、その両脚を俺の胴体に、両腕を頸部に絡みつかせる。梓の必殺技、胴締めスリーパーホールド。頸動脈が圧迫されることにより、脳への血流が絶たれ、意識が遠のいていく。薄れゆく視界の中に照幸の姿が映る。羨ましそうな顔をしているように見えたが、そんなはずはないだろう。笑っているのだ。無様に醜態を晒した、この俺を……。照幸、このままで終わると思うなよ。次こそ必ず……お前を……

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」C—27に、ぜひまたお越しください！